

第11回 雪明・新潟眼科フォーラム

(日本眼科学会専門医制度生涯教育認定事業No.25182)

Yukiakari・Niigata Ophthalmology Forum

日時: 令和6年2月18日(日) 9:00~15:15
場所: 『朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター』2階 スノーホール
〒950-0078 新潟市中央区万代島6番1号 TEL:025-246-8400
専門医単位: 1.5単位
会費: 現地: 医師: 3,000円 レジデント・視能訓練士: 1,000円
Web: 医師: 3,000円 レジデント・視能訓練士: 無料

プログラム

Program

9:00~	開会の挨拶 新潟大学大学院医歯学総合研究科眼科学分野 教授 福地 健郎先生
【第一部】	座長: 新潟大学大学院医歯学総合研究科眼科学分野 准教授 赤木 忠道先生
9:05~9:55	《1》小児眼科》 『小児眼科診療のアップデート』 福島県立医科大学眼科学講座 講師 森 隆史先生
9:55~10:45	《2》遺伝子》 『迫り来る眼科ゲノム医療』 九州大学大学院医学研究院 眼病態イメージング講座 講師 秋山 雅人先生
10:45~10:55	(休憩)
	座長: 新潟大学大学院医歯学総合研究科眼科学分野 教授 福地 健郎先生
10:55~11:45	《3》緑内障》 『君たちはどう生きるか。緑内障研究を通じて世界とつながる』 カリフォルニア大学サンディエゴ校眼科 Assistant Project Scientist 西田 崇先生
11:45~12:35	《4》網膜・硝子体》 『糖尿病黄斑浮腫治療に関する最近の話題』 山口大学大学院医学系研究科 眼科学 教授 木村 和博先生
12:35~13:35	(昼食休憩) ※お弁当をご用意いたします。
【第二部】	座長: 新潟大学医歯学総合病院 眼科 講師 寺島 浩子先生
13:35~14:25	《5》角膜・感染症》 『角結膜炎における抗菌薬点眼の使い方』 関西医科大学眼科学教室 病院教授 佐々木 香る先生
14:25~15:15	《6》白内障》 『患者満足度向上を目指した白内障手術戦略』 北里大学医学部眼科学 准教授 飯田 嘉彦先生
15:15~	閉会の挨拶 新潟大学医歯学総合病院 眼科 講師 植木 智志先生

【共催】雪明・新潟眼科フォーラム / 参天製薬株式会社 【後援】新潟県眼科医会 / 新潟市眼科医会

第11回 Yukiakari・Niigata Ophthalmology Forum 雪明・新潟眼科 フォーラム

日本眼科学会専門医制度生涯教育認定事業 No.25182



開催日時

令和6年 2月18日(日) 9:00~15:15

開催場所

「朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター」2階 スノーホール

〒950-0078 新潟市中央区万代島6番1号 TEL:025-246-8400

事務局

新潟大学大学院医歯学総合研究科 眼科学分野 事務局内

雪明・新潟眼科フォーラム事務局 TEL:025-227-2296 FAX:025-227-0785

〒951-8510 新潟市中央区旭町通1-757

【共催】雪明・新潟眼科フォーラム / 参天製薬株式会社 【後援】新潟県眼科医会 / 新潟市眼科医会

第11回 雪明・新潟眼科フォーラム



ごあいさつ

新潟大学大学院医歯学総合研究科眼科学分野 教授

福地 健郎



謹啓

雪明新潟眼科フォーラムは2014年の第1回から数えて今回で第11回を数えることになりました。新型コロナウイルス感染症が2023年5月に5類に引き下げになって以降、世の中もようやく本格的に再始動し、眼科関連の学会もそれ以前と同様な形で集い、実施されるようになってきました。

今回もこれまでの雪明眼科フォーラムと同様に、眼科の各分野でご活躍の若手リーダーの先生方にお集まりいただくことができました。各領域の最前線の話題を提供していただけるものと楽しみにしております。昨年の近視予防とAIとともに、遺伝子に関する話題は眼科領域だけでなく、今後の展開から目を離すことのできない大変に重要な話題です。じっくり拝聴いたしたいと思います。この会が、例年と同様に参加される皆様にとって眼科の新たな発見と体験の機会になってくれることを期待しています。ご参加を心よりお待ちしております。

謹白

小児眼科診療のアップデート

福島県立医科大学眼科学講座 講師 森 隆史 先生



略歴

1998年 愛知医科大学医学部医学科 卒業
1998年 福島県立医科大学眼科 入局
1999年 太田記念病院
2000年 ヒューストン大学オプトメトリー学部
2002年 米沢市立病院

2003年 埼玉厚生病院
2004年 福島県立医科大学眼科学講座 助手
2007年 福島県立医科大学眼科学講座 助教
2015年 福島県立医科大学眼科学講座 講師

小児眼科の領域は、外眼部、前眼部、緑内障、後眼部、眼窩、中枢を含む神経の眼科領域すべてにおよびます。また、小児の眼科疾患では、視機能の発達への影響から、早期発見と適切な処置が重要となり、併存する屈折異常や弱視、斜視にも配慮が必要です。

本講演では、治療などに変遷のあった主な疾患を取り上げて紹介します。また、乳幼児健診での視覚検査について、屈折検査の導入が進められている3歳児健診を含めてお話します。そして、弱視治療の基本的な考え方について、動物モデルでの基礎実験にも触れながら解説する予定です。

迫り来る眼科ゲノム医療

九州大学大学院医学研究院 眼病態イメージング講座 講師 秋山 雅人 先生



略歴

2008年 山口大学医学部医学科 卒業(3月25日)
2008年 九州医療センター 初期臨床研修医
2010年 九州大学病院 眼科
2012年 理化学研究所 ゲノム医科学研究センター 基礎技術開発研究グループ 研修生

2015年 理化学研究所 統合生命医科学研究センター 統計解析研究チーム リサーチアソシエイト
2018年 九州大学大学院医学研究院 眼科学分野 特任講師
2019年 九州大学大学院医学研究院 眼病態イメージング講座 講師

ゲノムは失明原因上位疾患も含め、様々な眼科疾患に影響している。ゲノムが発症に関与する疾患は、1)網膜色素変性のようなメンデル遺伝病、2)加齢黄斑変性や緑内障のように遺伝要因だけでなく環境因子も影響する多因子疾患、3)後天的な遺伝子異常(体細胞遺伝子変異)によって引き起こされる悪性腫瘍の3つに大別できる。2023年に遺伝性網膜ジストロフィの遺伝子パネル検査が保険承認されたことは記憶に新しいが、2019年にがんパネル検査が保険適応となり、眼部悪性腫瘍で活用が可能である。演者は、加齢黄斑変性や開放隅角緑内障といった多因子疾患に加え、網膜色素変性や眼部悪性腫瘍まで幅広く眼科分野のゲノム解析を行ってきた。また、日本網膜硝子体学会から最近公開された「網膜ジストロフィにおける遺伝学的検査のガイドライン」の作成にも貢献している。本講演では、これからの眼科診療においてゲノム情報がどのように活用されるか述べてみたい。

君たちはどう生きるか。緑内障研究を通じて世界とつながる

カリフォルニア大学サンディエゴ校眼科 Assistant Project Scientist 西田 崇 先生



略歴

2010年 岐阜大学医学部卒業
2010年 岐阜県総合医療センター卒後臨床研修センター研修医
2012年 岐阜大学医学部眼科 医員
2014年 岐阜薬科大学薬効解析学研究室 特別研究学生
2018年 岐阜大学大学院医学系研究科 博士課程修了
2018年 岐阜大学医学部附属病院 助教

2018年 岐阜大学大学院医学系研究科 講師
2020年 カリフォルニア大学サンディエゴ校眼科 客員研究員
2022年 カリフォルニア大学サンディエゴ校眼科 Visiting Assistant Professor
2023年 カリフォルニア大学サンディエゴ校眼科 Assistant Project Scientist
現在に至る

留学は異なる文化や環境との出会いを通して、視点の刷新や多角的な知識と技術の探求を促進する絶好の機会となり得る。このような経験は、臨床医としての日常診療にも多大な影響を与え、患者とのコミュニケーションや治療方針の策定において新しい視点やアプローチを取り入れる可能性を広げるものとなる。

今回の講演では、私が留学中に得た貴重な学びや緑内障研究における最新の動向、さらには臨床家としての広い視野がいかに重要であるかというテーマについて、実体験を元に話させていただく。

糖尿病黄斑浮腫治療に関する最近の話題

山口大学大学院医学系研究科 眼科学 教授 木村 和博 先生



略歴

1995年 山口大学医学部 卒業
1999年 大阪大学大学院 医学研究科(医学博士課程修了)
2003年 山口大学医学部附属病院 眼科 医員
2007年 山口大学医学部眼病態学講座(寄附講座)助教
2009年 山口大学医学部眼病態学講座(寄附講座)講師

2010年 山口大学大学院医学系研究科 眼科学 講師
2015年 UCL Institute of Ophthalmology Translational Vision Research
2016年 山口大学大学院医学系研究科 眼科学 教授
2017年 現在に至る

糖尿病網膜症において糖尿病黄斑浮腫は視力低下の原因の一つである。治療としては抗VEGF薬が広く使用され、以前に比べ視力改善および維持が可能となってきた。一方で再発、遷延化や無効例の存在を含めいくつか問題を抱えている。糖尿病黄斑浮腫の治療は多くの選択肢がある。抗VEGF薬においても、第二世代と呼ばれる新たな抗VEGF薬も加わり、更なる患者の病態やニーズに合わせた個別化されたアプローチが求められる。本講演では糖尿病黄斑浮腫治療に関する最新の治療法の話に加え、我々が自に行ってきた試みを交えながらお話したいと思います。

角結膜炎における抗菌薬点眼の使い方

関西医科大学眼科学教室 病院教授 佐々木 香る 先生



略歴

1986年 3月 大阪市立大学医学部卒業
1994年 3月 大阪大学大学院博士課程卒業
大阪大学医学部眼科学教室関連病院勤務を経て
1998年 7月 多岐記念眼科病院
2004年10月 富田眼科病院
2006年 1月 出田眼科病院診療部長

2012年 4月 JCHO星ヶ丘医療センター眼科部長
2019年 9月 関西医科大学眼科 病院准教授
2020年 9月 関西医科大学眼科 准教授
2023年10月 関西医科大学眼科 病院教授
滋賀医科大学非常勤講師

日常の診療で我々眼科医は、多くのキノロン点眼を処方する。充血はもちろん、眼脂、角膜浸潤、表層性角膜炎など、投与対象となる疾患は数多くある。一方、本邦における結膜常在菌のキノロン耐性化は容認できないのが現状である。本講演では、日常臨床で遭遇する充血(主として前眼部疾患)において、キノロン点眼が主役でないと思われる所見を取り上げたい。たとえば、涙小管炎、眼部帯状疱疹、偽眼類天疱瘡、抗がん剤による角膜障害、重瞼術後縫合糸障害、シールド潰瘍、マイボーム腺関連角結膜炎上皮症、カルシウム沈着など枚挙にいとまがない。キノロン点眼を投与しても治癒しない場合、耐性菌を疑う前に眼瞼や涙点を含めた眼附属器の異常、結膜の癒着、フルオレセイン染色の形状、潰瘍底の性状や触感、の透明性、血管侵入具合などのヒントを見逃さないことが大切である。不用意に抗微生物薬を追加せずに、適切に専門施設で紹介する際の注意点についてもお伝えしたい。また多くの結膜常在菌がキノロン抵抗性を獲得している現在、白内障や抗VEGF抗体硝子体注射の周術期を含め、日々の抗菌薬点眼の使用法を見直す時期だと思われる。本講演では主として難治性角・結膜炎の診断・治療のtipsをお伝えし、抗菌薬が必要な場面で必要な量で使用するために、少しでもお役に立つ講演にしたいと思う。

患者満足度向上を目指した白内障手術戦略

北里大学医学部眼科学 准教授 飯田 嘉彦 先生



略歴

2001年 北里大学医学部卒業、北里大学病院眼科 研修医
2002年 山王病院眼科 出向
2005年 北里大学病院眼科 非常勤(大学院生)
2007年 北里大学大学院医療系研究科修了 学位取得 博士(医学)
北里大学病院眼科 助教(病棟医)

2008年 北里大学医学部眼科学 助教(研究員)
2012年 北里大学医学部眼科学 助教(診療講師)
2014年 北里大学医学部眼科学 講師
2022年 北里大学医学部眼科学 准教授
現在に至る

白内障手術は機器の進歩や先人たちの創意工夫により、より小さな切開創で、短時間かつ低侵襲で手術ができるようになり、一昔前の水晶体の混濁を取るという「開眼手術」から、手術により屈折異常を矯正し、見え方の質(QOV; Quality of vision)の向上を目指す「屈折矯正手術」や「老視矯正手術」へと進化したと言われて久しい。眼内レンズ度数計算式も新世代の式が次々と登場し、術後屈折値の予測性も向上しているが、時に術後の見え方に対して不満足な患者に遭遇することがある。

手術はその手術手技もさることながら、術前の手術戦略が重要である。特に良好な満足度を得るためには目標屈折値の設定が重要である。最新の計算式や高機能の眼内レンズを使い、どんなに素晴らしい手術をしても、患者が期待していた見え方と異なり納得していなかったら、それは手術が成功したとは言えないであろう。良好な視機能を目指すための選択肢が増えたことは医師や患者にとって喜ばしいことであるが、術後の見え方に対する期待値が高まる中、適切なレンズ選択や目標屈折値の設定など、適切な手術プランの提案力が求められている。

本講演では手術プランを立案する際の度数設定のコツやレンズ選択、参考にすべき追加検査などを紹介させていただき、白内障手術の満足度をさらに向上させる一助となれば幸いです。